

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	38 / 2017 / 29-34 (再編集版)
タイトル	クマ大出没と青森県における300年間の推移
著 者 名	室 谷 洋 司

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

クマ大出沒と青森県における300年間の推移

第10代 室谷 洋 司

はじめに

ことし(2017年)の6月から、青森県はホームページで「クマ出沒情報」を公開し、県民に注意を呼び掛けている。クマ出沒といえば昨年が衝撃的であった。下に掲げた図1の「平成28年クマ出沒マップ」を見ると、十和田湖のすぐ南に二重の赤丸印がある。これは、2016(平成28)年5月から6月にかけて、秋田県鹿角市十和田大湯の十和利山山麓で発生した、戦後最悪のクマ食害事件である。タケノコ採りや山菜採りに来ていた人を襲撃し4人が死亡、3人が重傷を負い、青森県人も被害者に含まれていた、というものである。

この年は、青森県の地図全体にクマ出沒情報が満載されている。これは、どういうことなのか。そして、県内では今年に入ってからクマ情報が相次ぎ、このように県が注意を呼びかけていることも頷けることである。

各種資料を渉猟しながら、日本で唯一の猛獣といわれるクマ(本州ではツキノワグマ、北海道のヒグマとは別種)について、青森県内の約300年間にわたる出沒というか生息量の推移をまとめてみることにした。



図1 2016年の「青森県クマ出沒マップ」。青森県ホームページから（2010～2015年マップは32頁）

昭和年代：クマの県内分布・生息状況は限定的

我々が生物部で、八甲田山系や各所で採集会や調査で山歩きしていたころは、クマに注意しろ! などと言われたことは殆どなかった。クマといえば岩木山から白神山地にかけて生息し、西海岸地方にはクマ猟が専門のたマガギがいたとか、岩木山麓の養蜂場が襲われたとかのニュースが聞かれたものであった。。この頃の県内分布などについて、各種資料からの情報はつぎのようで、概略を抜粋して記す。

「青森県の鳥獣」(青森県、1972)

ニホンツキノワグマは、西津軽郡、中津軽郡、南津軽郡から秋田県にかけて、また下北半島にも生息している。(中略)このクマは北海道のヒグマのようにどう猛ではないが、本県唯一の猛獣である。下北半島が分布北限とされる。日本全国の現存数は7,000頭と推定され、県内にはおおよそ450頭位生息していると見られる。このクマの棲む原始林が伐採されているので、巧妙に冬眠しても絶滅が心配される程である。

「青森県の鳥獣」(青森県、1978)

津軽半島のツキノワグマ:津軽半島でも以前はクマがすんでいたのであろうが、絶滅したものと思われる。(中略)津軽半島でのクマの絶滅の年代は4、50年前ということになる。(後略)

「青森県鳥獣生息状況調査報告書(哺乳類)」(平田貞雄、1981)

この報告書に掲載の「ツキノワグマの生活域」を図2として掲げておく。青森県内における1970年代頃の生息域が示されている。上記の青森県による報告書に見られる分布域が主体となっているが、南・西津軽郡から秋田県にかけてのエリアから奥羽山系に近い三戸郡地方に若干、入り込んでいる。これに加えて北部(八甲田山系)や下北半島エリアの南部にも出没記録がある。

以上の3文献に示された分布域および出没記録が、昭和期の分布域あるいは出没記録といつてよい。しかもこの時代には、津軽半島では絶滅種となっていた。

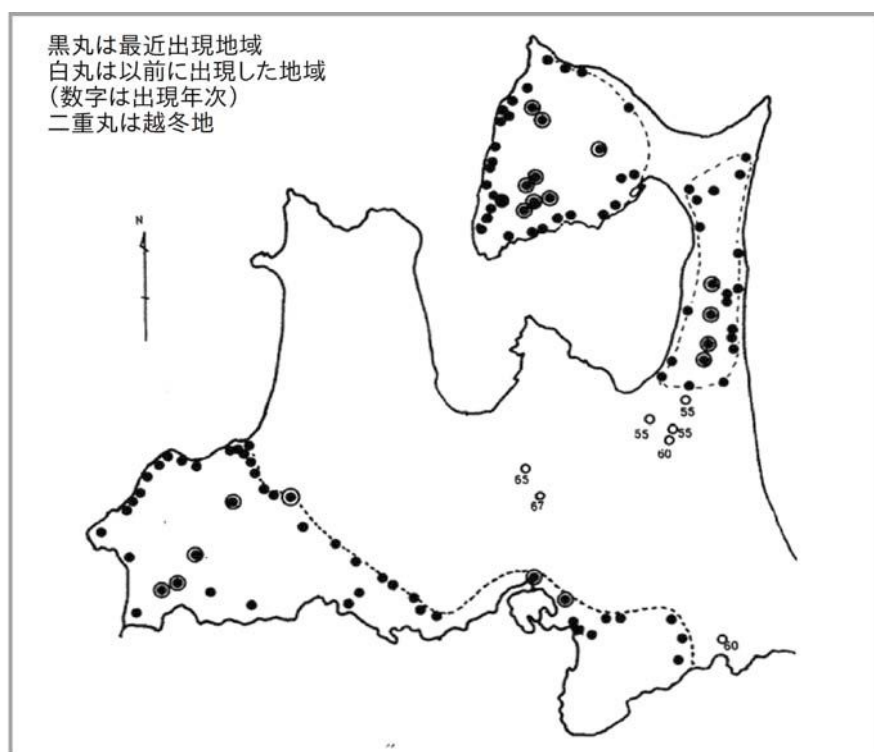


図2 青森県のツキノワグマの生活域(平田貞雄、1981)

藩政時代の記録：

「弘前藩の狩猟～主として熊猟について」(岩淵 功、2003。私家版から)

青森市制施行百周年記念として出版された、「八甲田の変遷」(1999)の著者として知られる岩淵功氏から、「弘前藩の狩猟～主として熊猟について」という貴重な著書をいただいた。

青森市在住の我々としては、近場にクマはいないものと長い間、認識していたので、昔は八甲田山にもいたという昔語りを耳にすることがあっても、このように明確なデータを示されるとは驚嘆すべきことであった。同書には数多くの詳細をきわめた図表が掲げられているが、その1枚を図3として掲げた。

岩淵氏は、本文228頁、別表41頁の大冊の中で、八甲田山以西では、人家が密集する地域とか平野部を除いて、ほぼ全域がクマの生活域であったことを示し、クマは主要な狩猟の対象であったとしている。その狩猟に関して、「藩の政策」、「猟師」、「熊猟の実績」、「規制と犯罪」、「熊荒れ」、「熊の利用」、「捕獲熊の分析」、「その他の鳥獣」などの項目を設け、詳細にわたって記述している。

別表では弘前藩の「国日記」をもとに、1685(貞享2)年から1869(明治2)年までの約200年間にわたる熊狩猟記録の1904例について、藩日記掲載日・狩猟者・場所・性別・年齢・体長などについて整理・記録している。ここに掲げた1枚は、これらを集約した「熊捕獲箇所一覧図」である。

これを見ると弘前藩内における当時のクマの勢力範囲を詳しく知ることができる。前記の1904例は、あくまでも藩に届けられた数字であり、当時の生息数とはまた別のことである。届出数からみると、藩政時代の後半になってから捕獲数も漸減しているようで、このことから生息数が減ってきている

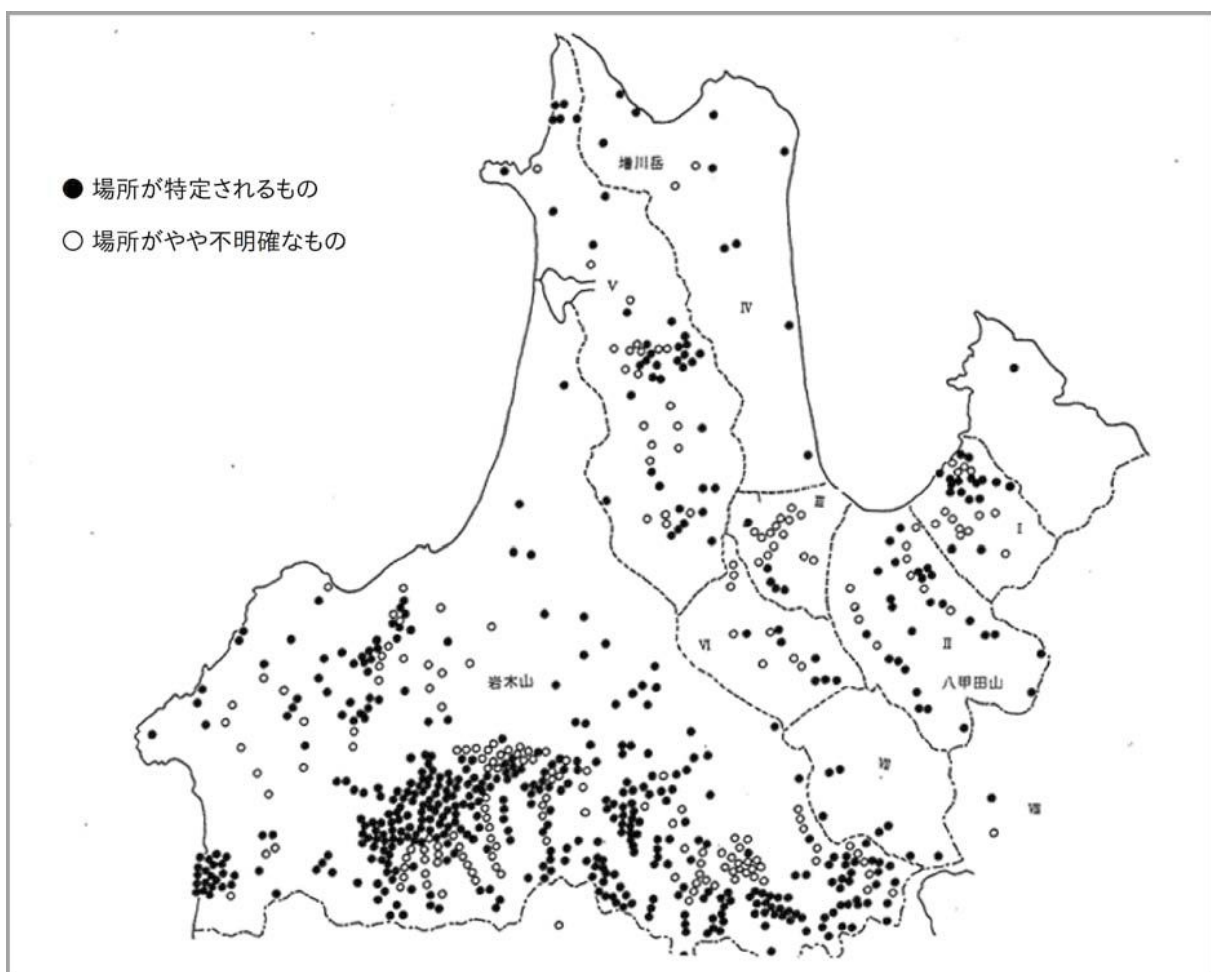


図3 熊捕獲箇所一覧図。弘前藩「国日記」記載の1685～1869年間の狩猟記録をもとに作成。
(岩淵、2003から)

のではないかと推測される。

以上は、弘前藩内での記録で、青森県の下北半島、南部地方ではどうだったのだろうか。手元に資料がないが、下北半島は現在においても生息域であり、一方、南部地方がクマ生活圏の空白エリアであった、ということは考えにくいことである。

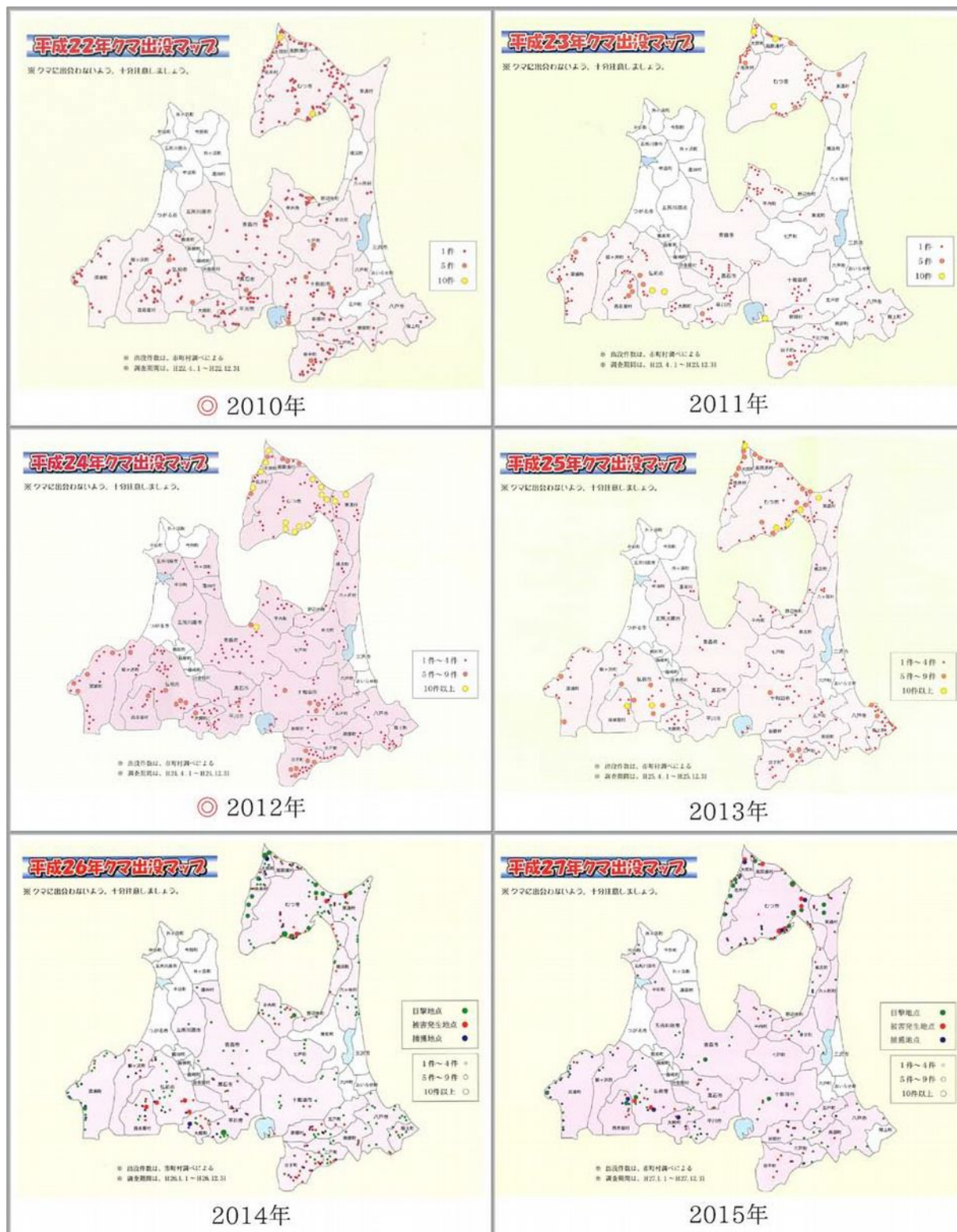


図4 青森県クマ出没マップ:2010～2015年。青森県ホームページから。2016年版は、29頁に掲載。(筆者注:◎印は、大出没年とされる)

このように見てくると、青森県においては明治以降、大正、昭和という時代の移ろいのなかで、クマの生息域が徐々に狭められ、個体数も急減していったことになる。そして、現在は……。

平成22年から現在までのデータ

最初に、衝撃的な2016(平成28)年の「クマ出没マップ」(図1)を掲げたが、青森県がホームページで公開しているデータは2010(平成22)年からあり、平成年代の推移を見るには貴重な資料である。ここに図4(32頁)として紹介しておく。

さらに、二つほどの資料をもとに、近年のツキノワグマの生息動向について抜粋して記しておく。「平成22年度自然環境保全基礎調査 特定哺乳類生息状況調査及び調査体制構築検討業務報告書」(2011年、環境省自然環境局生物多様センター)

ツキノワグマの個体数についての記述:ツキノワグマの分布が複数の都府県に跨り、各都府県で異なる年に個体数調査が実施されている。よって、今回は個体数調査年が2000年以降の推定個体数を積み上げることによって全国個体数を推定した。結果は12,297~19,096頭(中央値15,685頭)。青森県は601~1,437頭(中央値1,019頭)。

「ツキノワグマおよびヒグマの分布域拡縮の現況把握と軋轢抑止および危機個体回復のための支援事業報告書」(2014、日本クマネットワーク)

同報告書の「東北地域でのクマの分布動向」(著者:岩手大学・青井俊樹):青森県と福島県で2003年時点のクマの分布と比較して、顕著な分布の拡大が見られた(図5)。青森県では、平常年、大量出没年共に分布の最前線に拡大傾向が見られた(図6~8)。津軽半島において今後の分布拡大を注視していく必要がある。

この報告は、青森県についての情報は2006年から2012年までの県自然保護課の捕獲・目撃地点図によるものとしている。青森県の大量出没年は2006年、2010年および2012年とされる。

特筆すべきは、八甲田山系を中心としてその周辺部、特に北部の夏泊半島にかけてと、西側の青森平野にかけて拡大傾向が見られる。また、津軽半島ではまだ散発的ではあるが、基部および北部に向けて出没地点が増加してきている。下北半島では、いわゆる斧の柄の部分も含めてほぼ全域が分布域になっていると考えられる。



写真1 深夜、養蜂箱を荒らすツキノワグマ。八戸市大久保で自動カメラで撮影。(2017.6.14、八戸市提供)

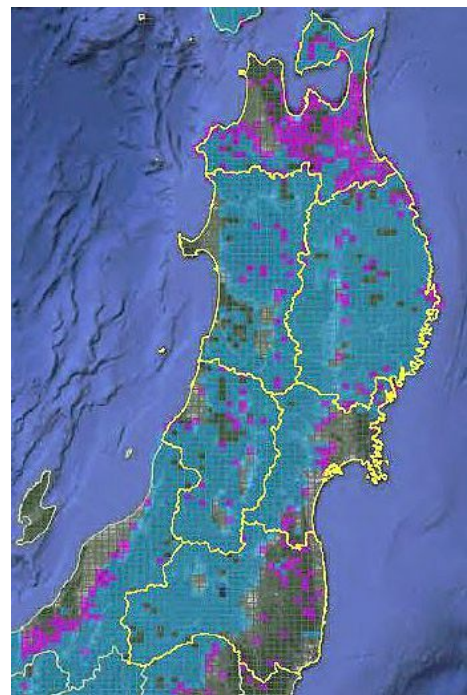


図5 東北地方におけるツキノワグマの環境省(2004)の分布(■)と、それ以降に拡大したメッシュ(■)
(日本クマネットワークの報告書、2014から)

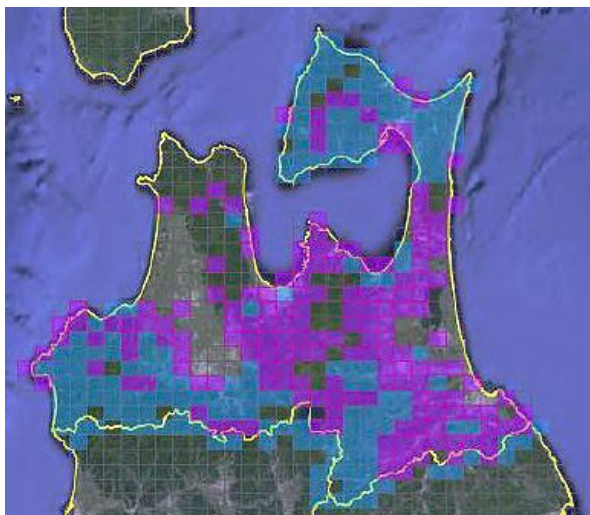


図6

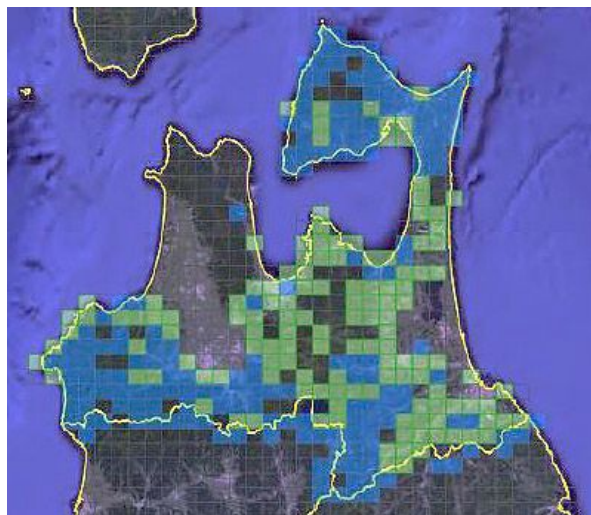


図7

図6～図8 青森県におけるツキノワグマについて、日本クマネットワーク「報告書」(2014)にまとめられた2006～2012の捕獲・目撃地点メッシュ図。2003年時点での分布と比較すると、175メッシュ増加。

図6 環境省(2004年)の分布(■)とそれ以降に拡大したメッシュ(■)

図7 環境省(2004年)の分布(■)とそれ以降(平常年)に拡大したメッシュ(■)

図8 環境省(2004年)の分布(■)とそれ以降(出没年)に拡大したメッシュ(■)

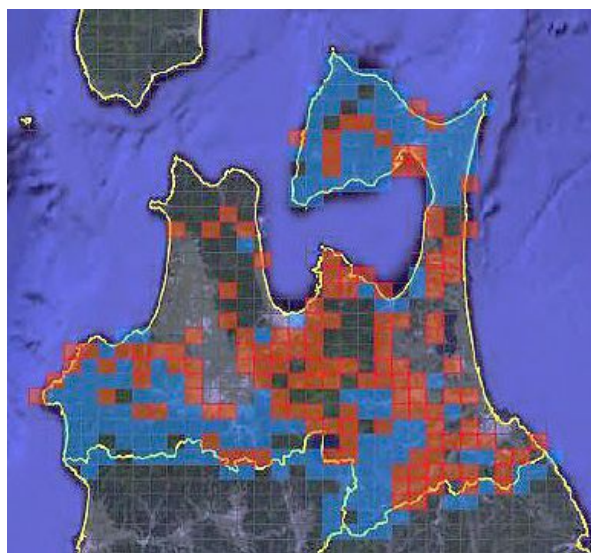


図8

おわりに

資料の羅列でまとまりのない記述になったが、全体を通して印象に残ったことを記しておく。

タイトルとして「青森県における300年間の推移」としたが、岩淵氏の著書を見て明治前期以前の藩政時代では、人家の密集地とか平野部を除いてツキノワグマの生活圏がほぼ全県に広がっていた。それが、大正・昭和にかけて狭められ、青森県がまとめた資料に見られるように、昭和年代は450頭位まで減少し、津軽半島では絶滅。さらに全県的に原生林の伐採などで絶滅が危惧されるまでになった。ところが、平成年代に入って県内各所で目撃記録が相次ぎ、なかには農作物が荒らされたり人身事故まで発生するようになった。

このことは、ヒトの生活圏が拡大し山菜採りで入山したり、自然度の高い地域が観光地ということから、結果としてクマの生息圏に入り込む機会が多くなったことも一因であろう。一方、クマ自体も餌確保のため頻繁にヒトの居住エリアやその周辺に入り込んできたということを示している。

環境省のデータ(2011年)では、青森県の生息数が601～1,437(中央値が1,019)頭という数値が出され、上記の450頭位と比べると倍増したことになる。この原因の詳細はどうか。引き続き動向を注視し、長期間のデータ分析からその答えが出されるものとする。